

日本語指導が必要な中学生に対する ピア・ライティングの実践とその効果

細矢 衡(京都教育大学大学院)

1. 研究の目的

- ①作文能力が低く、苦手意識を持っている **日本語指導が必要な中学生**に対して、作文の「構想、構成、作文」の各段階でピア活動を設ける **ピア・ライティング**の実践を行い、その効果を検証する。
- ②実践を通して得られたピア・ライティングの効果や課題を基に **より効果的な実践モデル**を作成する。

2. 理論的背景

①ピア・レスポンス

- ◆学習者同士による作文の推敲活動
- ◆教員による推敲活動と同等の効果

池田(1999)や広瀬(2004)他

②ピア・ライティング(牛窪 2010)

- ◆作文テーマ構想からのピア活動

⇒先行研究の理論を基にピア・ライティングを定義し直す

**文章の構想・構成・作文過程をピアと協働して
すすめる作文産出活動**

【引用文献一覧】

池田玲子(1999)「ピア・レスポンスが可能にすること—中級学習者の場合—」

『世界の日本語教育』9号, pp29-43

牛窪隆太(2010)「協働で書く試み ピア・ライティングとしての

「リライト活動」の可能性をめぐって」『言語文化教育研究』9, pp60-80

広瀬和佳子(2004)「ピア・レスポンスは推敲作文にどう反映されるか—マレーシア人

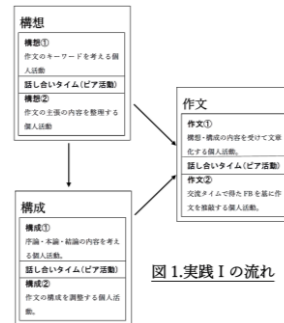
中級日本語学習者の場合」『第二言語としての日本語の習得研究』7, pp60-80

5. 総合考察

- ◆中学生段階の学習者は作文段階のピア活動では、主に **表現等の表面的な部分**に着目し、推敲を行う傾向がある。
 - ◆構想・構成段階では **内容に関する推敲**が多く観察できる。
- ※作文段階での内容面に関する推敲が少ない原因としては、池田(1999)が言語の知識不足によるところがあると指摘。
- ⇒**段階的なピア活動を行うことで、内容面や表現面等、学習者間で行える推敲の幅が広がる。**

3. 実践 I

方法



<対象>

中学3年生2名、2年生1名

1年生1名の計4名

<分析の手順>

- ①プレ作文と実践後の比較
- ②各ピア活動における変化の分析

図1.実践Iの流れ

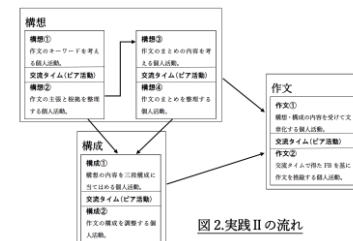
結果と考察

- ①**プレ時と実践後を比較すると、構成面や内容面での改善が見られた。**
- ②「**構成：内容面**」、「**作文：表現面**」での推敲でピア活動は有効。

課題：構想段階のピア活動が上手く機能しなかった

4. 実践 II

方法



<対象>

中学2年生16名

<分析の手順>

- ①プレ作文と実践後の比較
- ②各ピア活動における変化の分析

図2.実践IIの流れ

結果と考察

- ①**プレ時と比較した場合、構成面や内容面で改善が見られた。**
- ②「**構想：内容や表現面**」、「**作文：主に表現面**」でピア活動は有効。

課題：構成に関する話し合いがピア活動の中で見られなかった。

5. 実践モデル再考のポイント

- ①学習者が作文の **表現、表記、内容面**の全てに着目してピア活動が行えるよう、**チェックポイントを明示化**する。
 - ②学習者同士で文章の **構成**について意見交流ができる課題を設定する。
- ⇒**具体的な課題設定が中学生の場合は特に重要となる。**